

2003年11月5日

『アルジャジーラの戦争』イラク戦争報道で欧米メディアを圧倒

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

Toshiyuki/Maesaka

九・十一テロから二周年が過ぎたが、今、中東に一大旋風を巻き起こした『アルジャジーラ現象』が世界中に吹き荒れている。「オサマ・ビンラディン」のビデオ映像を放映して以来、カタールの衛星ニュース放送『アルジャジーラ』はイラク戦争では米軍のプロパガンダや情報操作のウソを暴き、スクープを連発して、国際メディアでの英米一極支配のカベをつき崩した。

米国は圧倒的な軍事力でイラクを簡単に打ち破ったものの、メディア戦争では『アルジャジーラ』の報道に再三にわたって手痛い目にあった。

九一年の湾岸戦争ではブッシュ前米大統領が『CNNの戦争だ』と慨嘆したが、今回のイラク戦争は『アルジャジーラの戦争』なのである。



アルジャジーラ本社前で筆者(写真右側)

(1) アラブで初の自由メディア・衛星ニュース放送

『アルジャジーラ』とはアラビア語で「半島」のことで、「アラビア半島」を意味する。イラクの近隣国カタールにある独立公共財団の衛星ニュース放送である。

英国 BBC ラジオのアラビア語放送部門を「民主化推進」を掲げるカタールの国家元首・ハマド首長がアラビア人スタッフごと買収して、百五十億円を運営費として提供して、九六年十一月から中東で初めてのアラブ語による二十四時間

ニュースチャンネルとして立ち上げた。

それまで中東地域では言論、報道の自由の全くなかった。政府は都合のいい官製ニュースだけを流し、政権批判をすると逮捕、弾圧されることが多かった。

アラブ地域で初の検閲のない自由なメディアとして『アルジャジーラ』はスタートし、ハマド首長はそれまで新聞、テレビを検閲していた情報文化省を一挙に廃止してしまった。

以後、『アルジャジーラ』は中東地域に旋風を巻き起こした。

『ONE OPINION・THE OTHER OPINION』(一つの意見があれば、別の意見もある)を社是に掲げて、ジャーナリズムの中立性・公平性・公正性にのっとりた放送を実現した。

ニュース番組や特集で、タブーとされていたアラブ各国の非民主的な王制や政治体制、男女不平等や社会問題を真正面から取り上げ、サウジアラビアやヨルダンの王制を容赦なく批判したり、敵であるイスラエルの閣僚もアラブのメディアでは初めて登場させ、自由に発言させるなど、欧米並みの自由な論調を売り物にした。

(2) 社是は『ONE OPINION・THE OTHER OPINION』

「反対方向」というライブの討論番組では体制批判派を出演させ一対一や複数で徹底

して意見を戦わさせ、インターネットや電話での視聴者の意見も即座にテレビの画面の下にながすなど視聴者参加番組を作った。

歯に衣着せぬ報道に対して、隣国から数百件ものクレームや抗議が続出、カタル国との外交問題に発展したが、カタル政府は「言論の自由から政府は一切介入できない」と拒絶。

リビア、モロッコは自国大使を召還したり、サウジやヨルダンなどは『アルジャジーラ』の支局を追い出して対抗するなど、トラブルが絶えなかった。「中東メディアの革命児」「アラブのお騒がせ者」はものともせず批判を続けた。

自由にモノが言えなかったアラブの民衆はズバズバ批判、発言し、少数意見も取り上げるメディアの登場に熱狂した。競ってパラボナアンテナを買って『アルジャジーラ』を見るようになり、視聴者は世界中で約三千五百万人にまで拡大した。

『アルジャジーラ』は中東の民主化の大きな起爆剤となっており、こうした社会現象が『アルジャジーラ現象』と呼ばれた。〇一年九・一一テロ後の『ビンラディン』のビデオテープの報道で一躍、「中東の CNN」から世界的なメディアにのしあがった。

イラク戦争では米、ヨーロッパなどで約一千万人以上も視聴者が増加し、戦争の真実を知るのに欠かせないメディアとなった。

(3)『アルジャジーラ』を取材、編集長をインタビュー

『ビッグボイス・タイニーカントリー』(ちっぽけな国の大きな声)とたとえられる『アルジャジーラ』はイラクの二つ隣りカタール国(人口約六十万人)の首都ドーハにある。

ドーハにはイラク戦争中は米軍前線司令本部があり、そこからわずか十数キロ離れた砂漠の中に巨大な衛星パラボナアンテナが林立し、こじんまりした白亜の本社ビルがある。

八月二六日、私は気温四十五度という炎暑の中、ここを訪れた。入口を入るとすぐ円形の放送センターがあり、中央の大画面にモニター画面が並び、記者やレポーター、アナウンサーがパソコン画面をみながらニュース編集や放送に忙しそうに働いていた。

取り囲むように放送室、編集長室、ビデオ映像が何万本も収納されている資料室などがあり、その一角にバクダッドで現地レポート中に米兵の銃撃されて犠牲になったターレク・アイユーブ記者の等身大の遺影が飾られていた。

編集局長室に現れた新任のアドナン・シャリフ編集長は、「ようこそ」とニコニコ顔で迎えてくれた。前任者のアル・アリ編集長は『アルジャジーラ』を立ち上げてここまで発展させてきた功労者だが、この五月に突然、辞任した。

アメリカ側の激しい攻撃や『アルジャジーラ』の記者やキャスター三人が旧イ

ラクの情報機関と関係したいという疑惑が発覚して、解任された？と英国・ガーディアン紙などに報じられていた。

この点をただすとシャリフ編集長は「その質問に答えることは出来ませんが、アリは五年の任期できており、イラク戦争も一段落したのでカタール TV に帰っただけだ」ときっぱり否定した。

『ワンオピニオン・アザーオピニオン』の社是は全く変わらない。この方針で報道したことで、イラクの旧政権からもアメリカ政府からも同様に脅されました。公平性や中立性を保とうと追求し続けて、双方から攻撃されるのです。



インタビューに応じるシャリフ編集長

私たちの編集方針や批判精神にこだわり続けたからなんです」と語った。

英米から学んだ報道の自由、客観報道のジャーナリズムの原則を忠実に守ったことで、「アルジャジーラ」は逆に米政府から攻撃される羽目になったのである。米国修正憲法第一条は『言論の自由』を高らかにうたい、それが米国の国是のはずなのに、米政府の行動は別であった。

(4) 米政府は「アルジャジーラ」を攻撃

米政府は「アルジャジーラ」がスクープした「ビンラディン」のビデオメッセージを米国のテレビが放送しようとして待ったをかけた。

二〇〇一年十月、パウエル米務長官はビンラディンのビデオテープを自粛するように「アルジャジーラ」に圧力をかけてきたが、ハマド首長（『アルジャジーラ』会長）は「言論の自由に介入できない」と婉曲に断った、という。

イラク戦争では『アルジャジーラ』は米兵の捕虜や死体の映像を流して、ラムズフェルド米国防長官を激怒させた。「アルジャジーラ」のアフガニスタン支局、バクダット支局などが米軍に次々に爆撃され、記者二人が死傷するなど、米国

政府の「アルジャジーラ」への嫌がらせは一層エスカレートした。

七月末には『ネオコン』のリーダーのウォルフォウィッツ国防副長官が FOX ニュースに出演して、「フセイン元イラク大統領を支持してニュースを歪めている」と「アルジャジーラ」を激しく非難した。

この九月五日には「ビンラディン」のビデオ映像を入手し、戦火のアフガン・カブールからレポートした「アルジャジーラ」のスター記者・タイシル・アツルーニ特派員が休暇で帰郷していたスペイン・グラナダの自宅でスペイン公安当局に逮捕されるという、衝撃的なニュースが飛び込んできた。

逮捕容疑は「アラルカイダのメンバーに属していた」というものだが、『でっち上げだ。報道の自由に対する弾圧だ』と「アルジャジーラ」は強く非難し、アラブ人権委員会やジャーナリスト機関とともに同氏の即時釈放を求めた。米国政府の「アルジャジーラ」つぶし、包囲網がじりじりとせばまりつつあるといえるだろう。

「アル・アリは何らかの圧力があって辞任したのか」の質問に対してはアドナン・シャリフ編集長は言葉をにごしたが、別の記者が翌日、そっと私に教えてくれた。

それによると、イラク戦争中にブッシュ米大統領からハマド首長に直接、電話がかってきた。「アルジャジーラを何とかして欲しい」という強い要請であった。

ちょうどイラク戦争ではバスラでシーア派が反乱を起こしたという米軍の発表の直後に「アルジャジーラ」の現地特派員の取材で町では何も起きていない平穏な街中の映像を流して「米軍の情報操作」のウソを暴くなど、アジャジーラの存在感がますます大きくなっていった頃である。



アル・アリは「首長にブッシュから圧力の電話があった」と局内でみん

アルジャジーラの放送センター内部

なに伝えて「気にすることはない。普段通りにわれわれはジャーナリズムの原則にのっとってやろうよ」と呼びかけていた。

目と鼻の先にある米軍前線司令本部のコーラル(大佐)からもアル・アリ編集長にひんぱんに電話がかかってきた。放送内容へのいちゃもんである。

「両方から取材して、それぞれの言い分を伝えるジャーナリズムの中立性は英米の基本ルールではないのか。われわれはそれを忠実に守って報道しているのに、どおいうわけなんだ」とアリが激しくやりあっているのを何度も聞いた、という。

「こんな電話があるなんて、米国もどうかしているぜ」とその記者は肩をすくめて話してくれた。

(5) 米国は二枚舌、偽善です

次に訪れたカタールの隣国 UAE(アラブ首長国連邦)の首都・アブダビにある「アブダビ TV」のモハメド・ドラチャド副編集長も九月二日の私のインタビューに対して、「ある日、米国人が来て、『イラクのサダム・フセインがアルジャジーラに金を出している』と言った。

『誰からそのような話を聞いたのか』と問いただすと、イラクの情報機関の情報だという。情報機関が流す情報が正しいはずがないでしょう。ところがそれをみんな信じてしまう。米国はアル・アリの標的にして圧力をかけました。

米国は『言論の自由』を強調しながら、われわれには容赦ない圧力をかけてきます。米国の偽善です。二枚舌の論理です。アル・アリはそのスケープ・ゴード(生贄のヤギ)にされたのです」と話した。

『アルジャジーラ』の成功に刺激されて、アラブ諸国では衛星放送が増え始め、中東のメディア戦争は今や第二段階に突入している。

サウジの資本やレバノン、UAE(アラブ首長国)など各国の民間資本が出資し、過激で、お騒がせな『アルジャジーラ』の代替物として、バランスの取れた報道を目的とした『アルアラビア TV』(UAE・ドバイ本拠)を設立した。イラク戦争直前の三月初めに放送をスタートさせた。

『アブダビ TV』(アブダビ本拠)もニュース報道枠を大幅に充実させて、『アルジャジー

ラ』と三つドモエで、フセイン元イラク大統領やテロの背後の存在などをめぐってスクープ合戦に突入している。

(6) 『アルアラビア TV』 'アブダビ TV' の三つ巴のメディア戦争

『アルジャジーラ』のシャリフは『私たちの後にきたTV局は、アルジャジーラを倒そうとする明らかな目標を持っています。彼らはアルジャジーラの編集方針が嫌いで、彼らの多くは今もって政府のために発言しています。

私たちは違います。報道の自由の限界は100%以上であり、報道の自由には天井はありません。そう言う意味で、他の局は競争相手だと私たちはみていません』

『アルアラビア TV』のサラ・ナジム編集長は「ライバルは『アルジャジーラ』ではない。質の高いニュースを提供し、突発ニュースだけではなく、ニュースの歴史的な背景にも迫る報道を心がけている」という。

『アブダビ TV』はサハク元イラク情報相を出演させイラク戦争のシリーズ番組を制作中。モハメド・ドーランチャド副編集長も「早く、バランスをとって、正確に報道することが編集方針だ。一方に偏らないさまざまな視点、見方、考え方から報道することだ」と熱っぽく語った。

国際情報秩序の中で、これまで圧倒的な力を誇示していた西欧メディア（CNN, BBC、ロイター、AP など）の対抗軸として『アルジャジーラ』が出現し、メディアの西欧支配のカベを初めて崩したのである。

激動の中東情勢を報道するますます元気いっばのアラブ衛星ニュース放送から目が離せない。